

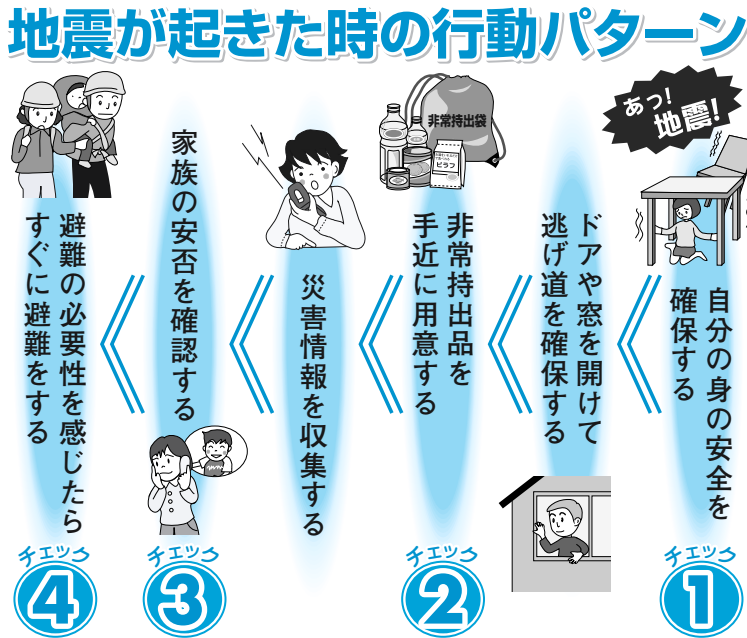
地震への備え

東日本大震災や阪神・淡路大震災では、たくさんの人々の支え合い、助け合いが多く、命を救いました。

東日本大震災から1年。いざというときに、自らの身を守るだけでなく、家族や近所の方を「助ける側」にもなれるよう、あなたも地震への備えについて改めて確認をしてみませんか。

◆「自分の身は自分で守る」

いざというときのために、あなたはどのような備えをしていますか？自宅地震にあった場合の行動から、どんな備えが必要か、確認をしてみましょう。



チェック

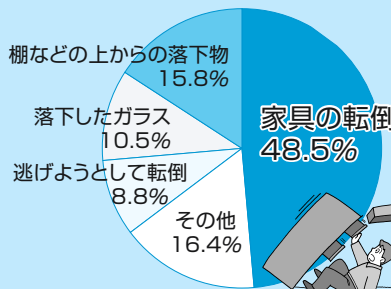
① 家の耐震診断、家具の転倒防止策を

阪神・淡路大震災では、けがをしたかたの48.5%が家具の転倒で、死亡したかたの約80%以上が家屋の倒壊などによる圧死・窒息死でした。このことから、家屋の倒壊防止策と家具の転倒防止策が重要であるといえます。

家屋の倒壊を防ぐ…昭和56年5月以前（新旧耐震基準により）に建てられた住宅は耐震性が低い可能性があります。耐震診断や耐震改修補助金制度を活用して地震に強い住宅にしましょう。

家具の転倒を防ぐ…建物が無事でも家具の転倒で下敷きになってけがをしたり、室内が散乱することで逃げ遅れたりする場合があります。安全な逃げ道を確保するためにも家具の転倒防止策を実践しましょう。

阪神・淡路大震災でけがをした人の原因



チェック

② 非常持出品は避難に影響が少なく最低限のものを

避難時に持ち出す非常持出品は、重くならないよう配慮が必要です。また、少なくとも1週間は救助なしで生活ができるよう、備蓄品を備えましょう。

【非常持出品の例】貴重品、非常食（3日分）、飲料水（ペットボトル500ml×2本）、携帯ラジオ（予備の電池も多めに用意する）、懐中電灯、救急薬品類、生活用品（プラスチックや紙製の皿やコップ、割り箸、缶きり、栓抜き、タオル、ティッシュペーパーなど）、その他（衣類、軍手、雨具、ライター、ビニール袋、生理用品、紙おむつなど）

【備蓄品の例】飲料水（1人1日3リットル）、非常食、燃料（卓上コンロとボンベ、固形燃料、マッチ、ロウソク）、新聞紙など、衛生用品（簡易トイレなど）、防寒用品（毛布、寝袋など）、調理用品（なべ、やかんなど）、その他（ポリタンク、バケツ、ビニールシート、布製ガムテープ）

※非常食は、賞味期限の長い特別な物を購入せず、食べ慣れているレトルト食品などを備蓄することでも十分です。（この場合、賞味期限に注意しましょう）

川口市地震防災ハザードマップや市ホームページなどを参考にして、自分の環境に合った備えを整えましょう。

チェック

③ 家族の安否確認には災害用伝言ダイヤル「171」を

地震などの災害時には電話がかかりにくくなるため、家族の安否確認には災害用伝言ダイヤル「171」を利用しましょう。災害用伝言ダイヤルは毎月1日・15日に体験利用ができますので、普段から使い慣れておくとい良いでしょう。また携帯電話でも使えるインターネット災害用伝言サービスもあります。



チェック

④ 避難場所の確認をしよう 安全な避難ルートを考える

避難場所は、広域避難場所2カ所、一次避難場所13カ所、一とき避難広場309カ所があります。どこに避難場所があるか確認するとともに、安全に避難できるルートも確認しましょう。

※避難は原則徒歩で。車を使うと渋滞を引き起こし、消防・救急活動などに影響します。